

10 ペルシャ帝国とエルサレムの復興

B.C.539~333 年

エズラ 1~10 章・ネヘミヤ 1~13 章

ハガイ 1~2 章・ゼカリヤ 1~8 章

ヨエル書・マラキ書・イザヤ 56~66 章

^{しんげん}箴言・^が雅歌・ルツ記・ヨナ書

手引き：第 13 課題・希望の実現、参照。

第二イザヤが預言したとおり、ペルシャのキュロス王は、オリエント世界に君臨する偉大な支配者となろうとしていた。彼は、B.C.550 年にメディア人を打ち破り、B.C.539 年にはバビロンを占領した。そしてバビロニアの捕囚民たちと共に、ユダヤ人にも自由を与えた。

ペルシャ帝国の統治は、アッシリアやバビロニアの統治とは全く違っていた。ペルシャ人は、占領した国の人々を強制移住させることはせず、従属する国民に対してもかなりの自由を認めていた。人々は、ペルシャの総督のもとに、それぞれの地方での自分たちの習慣や宗教を守り、自分たちの問題は自分たちで処理した。

エルサレムへの帰国

ユダの地に帰還を許したキュロス王の布告に応じたユダヤ人は多くはなかった。廃墟となったエルサレムに帰ったのは、ごく少数の祭司とその家族だけで、ほとんどのユダヤ人たちは、農業や商業の出来るメソポタミアにとどまった。

一方、エルサレムに帰還したユダヤ人は、だれにも歓迎されなかった。すでにサマリア人、エドム人、モアブ人、アンモン人、アラブ人たちが、ユダに定住していたからである。

ユダヤ人の集団は貧しかったので、預言者であるハガイやゼカリヤは、宗教生活の中心である神殿の再建に帰還したユダヤ人の心に向けさせるのに苦労した。

そのころ、オリエント世界も政治的に不安的になったが、ようやく紀元前 516 年神殿が完成した。

ネヘミヤとエズラ

ユダヤ人がバビロンから帰還してから 1 世紀近くたっても、エルサレムの城

壁は破壊されたままで、町は外敵に侵入される危険にさらされていた。そこで、パルシャの宮廷で仕えていたネヘミヤは、苦心の末、エルサレムに帰って城壁を再建してもよいという皇帝の許可を受けることができた。そこで、サマリアの総督サンパルトが邪魔しようとしたが、ネヘミヤは事業を完成させた (B.C.445~443)。

数年後、二度目のエルサレム訪問の時、エズラはすべての人の前で、律法の五書 (創世記から申命記まで) を、朗読した (B.C.397)。

とにかく、ユダヤ教を律法宗教にすることに力を尽くしたのは、このエズラである。

ヨエルとマラキーユダヤ人の離散

預言者ヨエルは、祭司の生活を改革しようと試み、すべての人々に、よりよい生活をするように勧めた。

実際、エルサレムが再建され、そこでユダヤ教が確立している間に、ほかの所でも同じくらい重要なことが起こっていた。これが、離散 (ディアスポラ)、すなわちペルシャ帝国全域に栄えたユダヤ人共同体の成立である。

とにかく、ユダヤ人たちは、自分たちの宗教を行く先々に携えて行った。こうして、ユダヤ教は、もはや小さな国土に限定された宗教ではなくなり、世界の様々な所に広がっていったのである。

11 ギリシャ帝国とマカバイ

B.C.333~63 年

コヘレトの言葉・マカバイ記 I,II,シラ書

ダニエル書・ゼカリヤ書 9~14 章

手引き：第 14 課題・知恵を生きる、参照。

ギリシャと隣り合うマケドニアのアレキサンドロスと共に、ギリシャの思想も文明 (ヘレニズム) もエジプト、メソポタミア、そして肥沃な三日月地帯に、何世紀にもわたって、近東地方に強い影響を与えた。新約聖書がギリシャ語で書かれたのも、このためである。

アレキサンドロス大王 (B.C.356~323 年)

哲学者であり科学者でもあるアリストテレスの教えを受けたアレキサンドロスは、当時としては最高のギリシャ的教養を身につけていた。

言い伝えによると、アレキサンドロスは神殿から出て来る祭司たちの行列に感動したので、エルサレムを破壊しなかつたばかりでなく、ユダヤ人が彼らの特有の慣習に従うことも許したのである。

プトレマイオス、セレウコス両王朝とユダヤ人

プトレマイオスという将軍は、エジプトを占領し、セレウコスも、北シリアのアンティオキアで独立した。

また、パレスチナは、紀元前のほぼ全期間、エジプトの支配下にあった。

しかし、シリアとセレウコス王朝も、パレスチナの支配をねらっていた。

パレスチナはこの対抗する二王朝の間で、紀元前 300 年から 200 年までの間、たびたび戦場となった。紀元前 198 年、ついにセレウコス王朝がエルサレムの支配を勝ち取った。それから 30 年間、ユダヤ人は、自分たちの生活様式によって、神殿での礼拝も許された。

この時代ヘレニズム（ギリシャ文化政策）は、ユダヤ人にまで影響を与えた。

ギリシャ思想の一大中心地となったエジプトのアレクサンドリアには多くのユダヤ人が住んでいた。彼らは聖書の原語のヘブライ語を理解できなかったの^で、聖書はギリシャ語に翻訳され、このギリシャ語訳聖書は、後に初代キリスト教徒に受け継がれた。

マカバイの戦い(紀元前 167~160 年)

ヘレニズムの影響を受けながらも、敬虔なユダヤ人は、自分たちの信仰を守った。だから、セレウコス王朝のアンティオコス・エピファネスは、これを変えさせようとした。彼は、ユダヤ人にギリシャの神々を礼拝するように命令した。紀元前 167 年、彼は自ら神殿でオリンピアの神ゼウスに豚をささげ、その神殿を汚した。さらにパレスチナ全土に神々を祭る祭壇を設け、ユダヤ人にそこでいけにえをささげるよう強要した。

しかし、モデインと言う小さな町に住む老年の祭司マタティアは、異教の神々にいけにえをささげることを拒否した。彼はシリアの役人を殺害し、五人の息子たちと山地へ逃亡した。間もなく、ほかの人々も大勢彼らに加わった。

マタティアの子ユダ・マカバイが指導者となり、戦士たちを率^{ひき}いて、アンテ

イオコスの軍隊をエルサレムから追い出すことに成功した。紀元前 164 年 12 月 25 日、ユダの神殿を清め、再びそこで礼拝を再開することが出来た。この日は今日においても、ハヌカの祝いとして守られている。

ちなみに、二マカバイ記 7 章 1 節から 23 節に、復活を暗示する壮絶な七人兄弟の殉教の場面が報告されている。

ハスモン王朝(紀元前 160~63 年)

ついにユダ・マカバイの二人の兄弟ヨナタンとシモンがパレスチナの独立を勝ち取り、ハスモン王朝が成立した。シモンの子ヨハネ・ヒルカノスは、30 年の間(紀元前 134~104 年)、国をうまく治めた。

しかし、ユダヤ人の中には、宗教より戦争や征服に関心を示すマカバイの王たちに反対する者も出始めた。ついに王家の人々の中にまで対立が起こり、アレキサドロス・ヤンナイの二人の息子ヒルカノス II 世とアリストブロス II 世が王位を争った。

新たに、世界の支配者となったローマ人が待っていたのは、まさにそのような状況であった。紀元前 63 年、偉大なローマの将軍ポンペイウスが、エルサレムに入城した。

12 ローマの世界制覇とイエスの誕生

紀元前 63 年~西暦 14 年

マタイ 1~2 章・ルカ 1 章~2 章

手引き：第 16 課題・イエスの宣教、

第 19 課題:解放をもたらすイエス、参照。

パレスチナの新しい征服者は、ギリシャ人と同じヨーロッパ人であった。ローマが勢力をのぼすにつれて、世界の中心は西のイタリアへと移っていった。

ローマはもともと共和制の都市国家として始まったが、長年の間に、地中海沿岸に植民地を持つようになっていった。従って、紀元前 63 年、ポンペイウスがエルサレムに攻め入ったとき、パレスチナは植民地になったのである。

ローマ帝国とヘロデ王

ちょうどこのころ、ローマ共和国は帝国になり、皇帝アウグストゥスが